

Title	平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究
Author(s)	浅野, 敏彦
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57898">https://hdl.handle.net/11094/57898</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	浅野敏彦
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第23276号
学位授与年月日	平成21年6月9日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究
論文審査委員	(主査) 教授 蜂矢 真郷 (副査) 教授 金水 敏 准教授 岡島 昭浩

#### 論文内容の要旨

本論文は、平安時代識字層の漢字・漢語の受容について、国語学的に検討するものである。

第一章「平安時代の漢字・漢語研究史と本論文の方法」、第二章「平安時代識字層の漢語受容についての研究」、第三章「平安時代識字層の漢字使用と表語についての研究」、第四章「結語—本論文の要旨と漢字・漢語研究の課題—」からなる(400字詰換算約720枚)。第一章は、第一節「漢字・漢語研究略史」、第二節「漢語について」、第三節「漢字・漢語研究の意義と本論文の方法」、第四節「本論文の構成」からなり、第二章は、第一節「本章の概要」、第二節「仏典音義との比較をとおしてみた景戒の漢語受容について」、第三節「『真福寺本将門記』の訓点をとおしてみた識字層の漢語受容について」、第四節「漢語動詞の構文的な位置からみた識字層の漢語受容について」、第五節「意味分野からみた平安時代識字層における漢語受容について」、第六節「選板表現をとおしてみた『今昔物語集』編者の漢語受容について」、第七節「まとめ」、付論「『今昔物語集』天竺部(巻一～五)の漢語語彙」から、第三章は、第一節「はじめに」、第二節「漢字専用文献にみえる平安時代識字層の用いた漢字の概要」、第三節「公家日記の漢字によって表記されていることば」、第四節「表語率と使用率とからみた漢字文における漢字使用の相について—『陸奥話記』を用いて—」、第五節「変動係数・使用率からみた平安時代漢字文献にみえる漢字の層別について」、第六節「まとめ」、付論「『今昔物語集』巻二・五・二七・二九の漢字」から、第四章は、第一節「本論文の要旨」、第二節「本論文の課題」からなる。第一章は、漢字・漢語についての従来の研究を見た上で、本論文の方法について述べる

ものである。

第二章は、『日本霊異記』、『真福寺本将門記』、『古典対照語い表』が対照とする『源氏物語』、『大鏡』などの仮名文、『今昔物語集』における漢語の様相から、また、漢語動詞の構文的位置や、漢語の意味分野から、平安時代識字層の漢語受容について検討するものであり、「漢語の層別化」を基にした方法によって、漢語受容の実相に迫ろうとするものである。

第三章は、公家日記における漢字、『田氏家集』『将門記』『陸奥話記』『日本霊異記』『尾張国解文』『小右記』『権記』『高山寺本古往来』といった平安時代漢字専用八文献における漢字使用について、「平安時代漢字文献対照漢字表」を作成した上で、使用率だけでなく、「表語率」や「変動係数」からも検討するものである。

第四章は、全体のまとめと、今後の課題について述べるものである。

### 論文審査の結果の要旨

漢字研究については、池上禎造氏、亀井孝氏、山田俊雄氏等以降の研究があり、漢語研究については、山田孝雄氏、池上氏、佐藤喜代治氏、柏谷嘉弘氏、松下貞三氏等以降の研究がある。

本論文は、それら多くの研究を踏まえた上で、漢字・漢語の「受容」の問題として、漢字・漢語を「層別化」しようとするものであり、平安時代の「識字層」において、「理解」されるものであるか、「使用」されるものであるかといった、「日常常用」の程度を検討していて、例えば、漢語について「漢文訓読のレベルに属する」理解語彙的性格の強いものと「日常の書簡用語のレベルに属する」使用語彙的性格の強いものとを分けて行こうとしているが、その方向は全体として評価できるものである。漢語については、山田俊雄氏の「漢字語」の概念も取り入れられ、漢字については、峰岸明氏が「訓読対象漢字」と「書記使用漢字」とを分けて行く方法も参照されている。

漢語について、異訓漢字の検討、訓点からの検討、動詞の述語としてのあり方の検討、「分類語彙表」を基にした意味分類による検討、『今昔物語集』における避板法についての検討など、一つの方法ではなく種々の方法によって、漢語の性格を浮かび上がらせている点がおもしろい。

漢字について、平安時代漢字専用八文献における「平安時代漢字文献対照漢字表」の作成は大きい労力の上に成り立っており、異体字の扱いに苦慮したものと見られるが、それに対する使用率に加えて、「表語率」、「変動係数」による検討は、文献の種類と使用率との関係や、使用率が低くても豊かに用いられる漢字の存在、文献による偏りを明らかにするなど、見るべきものがある。

直接の検討対象とする文献のみならず多くの文献を見ており、また、種々の比較を通して漢字・漢語の性格を検討するのであるが、『色葉字類抄』を始めとして、それぞれに他の文献と比較を試みていることも注意されてよい。

ただ、それにしては各節の結論は淡泊に感じられる。「層」という用語の意味するところは、もう少し明確にしてほしいと思われる。個々の記述に問題のある点もないではない。なかなか困難ではあるが、「識字層」の中の幅に注意する必要もあろう。漢字についての

検討と漢語についての検討とが総合されるとどうであるか、さらに述べてほしいところであるが、これは今後の課題であると言うべきであろう。男性・女性、および、「書き言葉的」「話し言葉的」、「あらたまり」度、ないし、「日常的」「非日常的」と、「層」を立体的にとらえて行こうとする「概念図」は、おもしろいものであるが、今後の問題である。

いずれにせよ、漢字・漢語の研究は今後とも進展して行くであろうと考えられるが、本論文はその一つの礎となるものと見られる。

なお、2009年5月1日、本論文の審査を行うとともに、学力の確認を終えた。以上のようなので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。